

小泉信三著「読書論」岩波新書、岩波書店 1950年10月25日刊を読む

如何に読むべきか

1. (1)特にすすめたいのは難解と平易とを問わず、同じ本を再読三読することである。
(2)実際相当の大著を、ただ一度読過したばかりで理解しようとするのは無理である。
(3)難解の章句が一読過では解せられないという外に、一回の読了ではどうしても書籍の部分に囚われて、それと全体の関係が分らない。
(4)二度或いは三度読んで見て、始めて著者の思想の全体、その全体における個々章節の意義または重要性というものが把握される。
(5)読書百遍義おのずから通ずといい、西洋で Repetitio est mater studiorum(繰り返しは学問の母)という格言は、難解の章句も反覆熟読すれば分るといわんとしたものであろうが、それと共に、一の書籍の思想を一の全体として、個々の部分を全体に対する適當の比例において受け取るため、再読三読はぜひとも必要である。
(6)やはりショーペンハウアーがそれを言っている。
2. (1)「^{いやしく}苟も重要な書は、直ちに二回読むべきである。
(2)何となれば、一には、問題が二度目にはその諸聯関に於てよりよく会得せられ、且つ人は終りを知るときに初めて始めを理解するからであり、また一つには、人が二度目には、^あ有らゆる章句に初度とは違った気持ちと気分とを以って臨み、従つて^{あた}宛かも一物を別の照光を以て^み見るかの如き違った印象を受けるからである。」
3. (1)庭苑を見る場合、殊に曲折の多い日本の名苑を見る場合、私はしばしば読書を想起する。
(2)私は先年ブルーノ・タウトの「日本美の再発見」に教えられて、京都に往き、桂離宮及び修学院を拝観したのを始め、いくつかの有名な庭苑をみたが、始めて足を踏み入れたときは、心の用意が足らず、一木一石毎に目を奪われるから、庭の構造全体というもの、その全体の上においてこれらの木石の占めるべき位置、したがって造庭者の意図は、これを理解し鑑賞することなくして終ることが多い。
(3)それは二度三度、しかも続けて二度三度歩みを運ぶことによって、始めてなるほどと胸に落ちる。音楽の名曲を聴く場合も同様であることは、既に誰れか言っていることと思う。
(4)殊に複雑な構造を持つ交響曲の如きは、始めてただ一回それを聴いて、直ちにその美しさ或いは大さの全体を解し、味わうというごときことは到底あり得ない。
(5)名曲は反覆して聴くべきものであり、それによって始めてその真価を知り、或いはいよいよ

よその真価を知ることが出来る。

(6) そうしてまた、斯く反覆して聴くに堪えるか否かということが、その真価の最も確実なテストとなる。

(7) 真実偉大なる作品が、これをくり返して聴けば聴く度ごとに新しい何ものかを人に与えるのと反対に、初めて聴いて、ちょっと気が利いて面白いような新作が、二度三度とレコードを聴く中に、忽ち退屈極まるものとなってくることは真に^{てきめん}覲面で、寧ろ恐ろしいといってもよい位である。

4. (1) 書籍もまた同様で、再三反覆して読むことにより、人は始めてよく著者の真意を会し、また再読三読することによってその真価を判ずることが出来る。

(2) さらにやや時を隔てて同じ本を読み、そこに自分の成長を認めるのも愉快なことである。

(3) 少年が柱に印して身長を測り、自分で自分の成長を知るように、時を隔てて同じ本を読んで見ることは、自分で精神的身長を増大を知るゆえんである。

(4) 始めて読んだときに全く理解し得なかったことを今度新たに理解すること、かつて漫然読み過ぎた箇処に深い重要な意味の潜んでいたのを見出すこと、或いはまた反対に、昔感心^{きと}して読み、傍線などを引いた章節が空疎な美辞麗句に過ぎなかったのを覚ること、また同じ傍線によって、幼稚であった筈の昨日の吾れに意外に正しい眼識があったのを知ることなどは、誠に無上の楽事と称すべきものであり、世の読書人たるものは、いずれもこれについて無数の語るべき話題を持っているであろう。

P.26 ~ P.29

<コメント>

ショウペンハウエルに続く、小泉信三先生の「読書論」。本書は、1950年に第1刷、1964年に20刷改版、2019年8月に48刷と70年間読み続けられた日本における「読書論」の「古典」といえる。折角慶大を受験するならと、慶大法学部の受験の前日まで本書を読み続けていたら、国語の問題文に本書が出ていたのでとても印象深い。以来、「自分の読書」の教科書とさせていただいている。

2020年12月7日(月)